

かぜをひいた日は



かぜをひいた日は

風邪を引いた日は、こおろぎの天ぷらにかぎる、などという噂が、にんげんのあいだでひろまっているので、困ってしまうのです。しかも今はススキが空をなぜる季節。こおろぎたちは丸まると美味そうに肥っているし、にんげんは北風にのどをやられてコンコンです。

「にんげん様をよ、いがいがと苛めなさんな、頼むから。おれっちってば、ただでさえ巢籠もりの準備で忙しいのに、あんなでっかいのにかまってる暇はないんだよ」

こおろぎは、北風に必死で抗議しますが、北風は北風で別の言い分があります。

「だってうれしくねえか、春夏秋と、ずうっとこもってたんだからよう。こん季節だけじゃ、わしらが出番は。吹いても仕方ないって顔して許してもらえんのは、う、う、うれしくねえかあ」

そんなふうに言い放つと、北風はぴゅうぴゅうどっかに行ってしまうのです。うれしいのだったら、もうちょっとひとさまに迷惑を掛けないでいればいいのにと、こおろぎは思うのですが、北風は北風なので、そうはいかないようなのです。まったくおれっちを見習えよ、ちっと稲穂をしっけいするだけで、あとはいい声で鳴いてるだけだぜ、全く平和なもんなのに、何であんな噂がたちまったもんかね。こおろぎは愚痴りながら、今日も巢を出る身支度を整えました。

「あなた、くれぐれも気をつけてね。にんげんには近づかないでね」

こおろぎのおくさんは、夫の触角につばをつけて照りを出してやりながら、何回も注意しています。

「おう、今日は何とか早めに帰るぜ。やつら、この頃は月明かりをたよりに寄ってくるからな」

「行ってらっしゃい。そして、帰ってらっしゃいね」

「行ってくるよ。そして、帰ってくるよ」

ただでさえ今夜は満月なのです。てらてらしたこおろぎの身体が、一番目立ってしまう晩です。いくら触角をぴんと張っていても、背後から来られては、一とたまりもありません。こおろぎは、とりあえず今夜のノルマ、枯れ草一〇ちぎりを果たしたらすばやく帰ろうと、決めました。

にんげんは知らないことですが、水のない田んぼにも、月明かりは映るのです。それは大きなもののいない静寂にこそ与えられる、きりりとした美しさでした。こおろぎは、半分はそれを見るのが楽しみで、出かけてゆくようなものでした。満月のまるさをなぞれば、月を一周したような達成感を味わうことができるのです。おくさんにも教えてあげたいのですが、うわさのせいで震えているばかりになってしまった妻が、そんなものにつられて巢から出てくるわけもありません。

今日もこおろぎは、月を見上げたりなぞったりしながら、せっせとちぎりほどすると、ふっと息をつきました。そばには小川が流れています。小川にも月が映っていて、きらきらと光っています。

「月ってやつはたいしたもんだ。色んなところに映っちゃうんだからな。俺はそんなふうにはいかねえ。どこにいても、陰をつくるだけなものな」

そうひとりごとをつぶやいたとき、ふっと目の前が暗くなりました。こおろぎは、反射的に枯れ草のあいだに身をひそめました。

にんげんが来たのです。にんげんは、一人のようでした。黒い長靴が、映った月を荒らします。月の逆光で影をまとい、顔は定かに見えませんが、かつては白かったであろう薄汚い着物を前で合わせ、適当に紐でくくっているのが確かです。毛でもじゃもじゃの手が、てんでの外れなところを探っては枯れ草で皮膚を切り、血をにじませています。

「いてえなあ。ああ、でも早くこおろぎを捕まえないと。今日こそは逃げられちゃ困る。おっかあが、肺炎になっちゃう。ああ、でも本当にいてえなあ」

何だかちょっときのどくです。こおろぎは、隠れながら、にんげんに問いかけてみました。

「おかあさん、そんなに悪いのかい」

にんげんは、たいそうびっくりしたようでした。

「だれだ、細っこい声で話しかけるやつは。こおろぎかい、なら出てきてくれよ」

「やなこった。天ぷらにされちゃうんだろ」

「知ってるのか。すげえな、こおろぎの情報網は」

「すげえもなにも、そこらへん蔓延ってる噂だろうがよ」

「だからなかなかつかまらねえのか。もう、この辺をよう、4日も歩ってるんだぜえ。幸いせんから月が出てるし、暗くて見つからねえってことはないはずなんだが、何故かほいほいと跳んでる虫が見当たらないもんで、一匹も採れなくてよ。こうやってる間はおっかあが一人っきりだもんで、なにかあるんじゃないかかってはらはらしちまう。しかも夢中で探してるうちに迷子になって、帰るのにえらく時間がかかるってもんだ。夜更かしするから朝は起きられねえし」

「迷子になるのかよ、にんげんのくせに」

「おう、なるさあ。何だかこう、枯れ草ばかり見てるから、目が回っちゃってよ。気がつくとも知らねえ処にいるんだ。待ちきれなくて昇ってくる朝焼けが胃にきりきり来る。そういやお前らは迷子にならねえのかあ、こおろぎのくせに」

「おれっちはならねえさ。ちゃあんと目印つけてるもの」

こおろぎのくせに、といわれてしまったことにいささか憤慨しながら、それでも身は隠して、こおろぎは誇らしげに答えました。

「おれっちの触覚によ、おくさんが唾つけてくれるのよ。ただの艶出しとはちいと違うんだぜ。こいつをその辺に振りまきながら歩いてくる。そうすると、唾の匂いが残るだろ。帰りは、匂いをたどって行けばいいんだぜ」

そこまで聞くと、にんげんは少し笑ったようでした。月に白い歯だけが浮かび上がったので、こおろぎにはそう見えました。

「なる程な。ということは、こおろぎの唾のにおいをたどっていけば、巣にたどりつけるってことか」

そこまで言われて、こおろぎははじめて、しまったと思いました。さすが自分はこのこおろぎだ、う

っかりしてたぜ。しかしせっかくそう反省しても、もう後の祭りです。あとは、おくさんが狙われないように一目散に帰るしかありません。こおろぎは、猛ダッシュで巣への道をたどり始めました。あらん限りの力で飛び跳ねますが、にんげんの足には到底かきません。自分がみつつ跳ぶたびに一步近づく余裕のあしおとを、絶望的な気持ちで聞きながらも、こおろぎは進むしかありませんでした。腹の横にぞろっと開いた空気穴が、激しく収縮をはじめます。しかし駄目だ、こんなところでつかまっては。滑り止めのついた前肢で正確に地面を蹴りはじて、こおろぎはおくさんの顔を思い出していました。行って来るとき、帰って来てねといわれて、そして帰ってくるよと答えたのです。なので、こおろぎは帰らなくてはならないのです。

どのくらい跳んだのか判りませんが、いつしかこおろぎは馴染みある風景にたどり着いていました。おくさんが気に入って持ち帰った、金色の土がお帰りといってくれています。こおろぎはそこではじめて立ち止まり、にんげんに対峙しました。にんげんは余裕の笑みを浮かべているように見えます。白目がきらりと光ったので、こおろぎにはそう見えました。

「おまえはやっぱり、こおろぎだな。俺たちにんげんが、お前らの唾の匂いなんぞ、わかるはずあるまいて。動揺して飛び跳ねてくれて助かった、これでおっかが死なないですむ」

にんげんがそう言うのを、こおろぎは真っ白な気分になって聞いていました。

「おっかが死なないですむのは結構なことだが、おれっちが死ぬな。その前に、頼みがあるんだ。おれっちにはおくさんがいて、帰って来いって言われてるんだ。だからいったん、帰らなきゃなんねえ。奥さんは怖いからな。言うとおりにしなきゃなんないからな。そしてまた、巣から出てくるよ。ほんの一瞬ですむんだ、もしおれっちが出てこなかったら、おくさんも持ち帰っていいよ。どうだろう」

にんげんはしばらく考えていましたが、おしまいにはこう言いました。

「いいだろう。約束しよう。どうせ、いつでも巣を壊しちまうことは出来る。そうなったらどうなるか、判らんでもないだろ、こおろぎよ」

「ああ。助かる」

こういい残してこおろぎは、自分の巣へと入ってゆきました。

なかではおくさんが寝ずに待っていて、こおろぎの顔を見るとそれは嬉しそうにしました。

「行ってきたよ。そして、帰ってきたよ」

「ありがとう、行ってきて、そして帰ってきてくれて」

「でも、すぐまた行かなきゃならないんだ」

「あら、そうなの。行ってらっしゃい、そして、帰ってらっしゃいね」

「行ってくるよ。でも、帰って来れないんだ」

「あら、そうなの。じゃあ、行かないほうがいいわね」

「いや、でも、行ってくるよ」

おくさんは、一瞬そのつぶらな瞳で首を傾げましたが、思い出したかのようにこう言い添えました。

「行ってくるだけだったら、もう唾はつけなくてもいいわね。ちょうど、唾切れだったのよ」

「ああ、ちょうど良かった」

「行ってらっしゃいね」

「行ってくるよ」

こうしてこおろぎは、未だほの暗い巢の穴から出て行きました。そして約束の通り、帰ってはきませんでした。おくさんは、二日ほど泣いた後、その涙を飲んで三日間生き延びました。そして三日目の朝、いきなりまわりが明るくなるのを見上げると、黒い五本指が自分の身体をつまみ上げるのを認めました。おくさんは、ああ、あのひとは、帰ってくる代わりに、行ってきたのだな、と思い、生まれたてのような真新しい気持ちで、やすやすとつまみ上げられていました。